



成 蹊 會 誌

第 八 号



たしかなる足ぶみ

君たちは世の中に出て、学校の窓から見た世の中とは随分違っているだろう。がつかりしたこともあるし、又こいつは面白いと思つたこともあるけれども、毎日同じような仕事をくりかへすことはいやに誰も思つていよう。そしてそんな一生を送つてはと思ふ折もある。しかし毎日目先きの變ることが生きる為の必要な条件だろうか。

又目先きが變らなければ人の目的がとげられないだろうか。太陽は東から出て西に入る。冬が去れば春が来る、屋の次は夜だ、自然のものは皆が同じ軌道を通っている。毎日同じ仕事をするをつまらぬと思ふものは、あわれむべき人だ。同じ仕事のうちに種々の深い意味が潜んでいる。ひとの世の旅路をふりかへつて見るとその路の面白さや變化が嬉しいのじやない。その旅路を踏みしめる自身の一足づきの體かさが大事なのである。君たちは日々の旅路をしっかりと踏みしめて進みたまえ。

この氣持を失はなければいつとなく知らぬまに緑の山、清い泉の美しい村里に踏み入れられるだろう。

——中村春二先生著「たしかなる足ぶみ」より——

偶感

文傳正夫

私は、今にして思へば、必らずしも、理想的な成蹊の学生ではなかつた。中村先生からは度々叱られたけれども、凝念法にしても、作業にしても、勉強の方は言うも更なりだが、どうも眞面目にやる氣がしなかつた。いやいやくつ付いて行つたと言う方がむしろ當つていふだろう。

そんな訳だから、成績もズバ抜けてよくはない、が、そうかと言つて特に悪くもなく、勉強もしない代りに大して遊びもせず、其日其日を何となく過して、卒業してしまつた。

自然、肝に銘じるような思い出もない。

交友も特に親しい人を作るでもなく、特に憎み合う人もなく、今日に至るまで、同じ態度で同じように交際している。

思うに、別に非常に志望して入つた訳ではなく、言はゞ偶然に入つた学校に、その時偶然と一緒に居たと言う丈で、どうしてそんなに將來迄も親しみ合へる友達となるであろう。良い例は、海外へ赴任や旅行する船の上で出来た交友関係は、一旦陸へ上れば、全然顧みられなくなる。これは船の上では、外へ行く訳には行かないから、毎日顔を合わせ、暇でたまらないからお互に困つて共通の遊び等をやる。その間は百年の知己のように見えるが、船が陸につくと、各々別々の方向に飛び立つてしまつて、まづたく船の上のあの親しさはなくなつてしまふのである。

しかし、母校の感情は、どうもそれとも一寸違ふのではないか。まだ其処には何か外にあるような氣がする。

私は、これは年齢と言うファクターが入つて来るからだと思ふ。好きにつけ、悪しきにつけ、あの過ぎ去つた日は、遠く地平線の彼方に消えてしまつて、再びかへつては来ない。人間は都合よく、いやな事は早く忘れたい、又、事実早く忘れると言う習慣をもつていゝ事も加はつて、若い日の想い出、それも適当に取捨された想い出が、同窓と言うものを特になつかしく、美化して考へさせるのではあるまいか。

もう一つ書き落してならない事は、恩師、中村先生の存在である。先生は、必らずしもやさしい方ではなかつた。時には、今の言葉で言へば、随分ワマンでもあられた。むしろ神経の鋭い、言葉のきつい方で、私なども、一、二度叱られた時はまづたくふるへ上つたものだ。

しかし、それにもかゝらず、先生の事を想うと独りでに目頭が熱くなるのは、どうしてだろう。

それは先生のあのやさしい眼だ、と思ふ。

あの眼鏡の奥から見て居られる眼は、少し尻下りの、睫毛の長い、憂いをたゞへて居られる眼だつた。後年、お志を成就せられず、中途でなくなられた運命を暗示するような眼だつた。

恐らく先生は、私達子供にはわからない色々の事を考へられて、時には怖く見せられたのだが、根は、氣の弱い、柔しい方だつたのではないかと思ふ。

中村先生のお人柄、行動、御趣味は、今日の私に相当影響を与へている。私の今の趣味等は先生の御趣味をソックリ頂戴して、その上に

一つも出て居ないと言つても過言ではなからう。
いつかの会誌にも書いたように、微力をつくして会の為の為に忝らき度いと念願しているのも、専へに、中村先生に喜んでいただき度いからで、外に理由はない。

あの眼で、先生が何処か、暗い木の蔭とか壁の隅とかから、ジツと見て居られると思うと、いかに失意の時でも、振るい立たずには居られない。私が此世を去る時まで、先生は私の守護神のようなものだ。前に述べたような、還つて来ない日の感傷とその中心にいつもある先生の姿、それが、私をして、成蹊の為になる事ならば、何でも微力をつくして見たいと誓はせるのだ。
(成蹊会々長・実務三回卒)

入学当時の事ども

林田俊介

時は明治四十五年四月、今こそ池袋は東京都の繁華街ですが当時は麦畑の真中に豊島師範があり、其隣に小さなバラツクの学舎少し離れて中村先生の御宅があつた。これが成蹊学園の発祥成蹊実務学校、三月に入学試験があり入学を許可されて四月一日の入学式を楽しみにして居つた処、火災に罹り子供心にすつかり失望しましたが程なく復興して学業が始まりました。

中村先生が修身国語、父君秋香先生の歌集で和歌のたしなみを付けて下さる。遣沢先生は英語数学、小林先生は英語漢文哲学、当時八釜敷かつた八八艦隊の様な時事問題から宇宙組成の事迄事象百般について、顎鬚をひねりながら興味深く話していただき我々の常識の基礎が

涵養された。内野先生は国語蹴球を、後藤先生は体操、歌詞は忘れたが納豆／＼木村屋のパン鍋焼うどんと東京一日の状景を表した唱歌も教へていただいた。自殺された若き詩人北村透谷の夫人北村先生、当時珍しかった洋装をして来られ、我々の目を見張らせたものでした。

津田英学塾を出たばかりの多賀先生等小ぢんまりした寺小屋式に一寸毛のはえた様な学校でしたが、中村先生を始め諸先生が皆御若かつたので活気もあり誠に和やかな気分が勉強しました。学校の裏は畑が広々と続き畠に遊びに出ると畠を荒すと附近の百姓親爺に追いかけられた。豊島師範の裏は立教の原で午後には春の陽をあびて中村先生が引率され立教の原其他附近を歩きました。小高い丘があり其上には丁度ボケの花盛り、英語を習いたての我々に中村先生がボケホケホックスとボケの花を機縁としてホックスの単語を覚えさせて下さる。

土井先生には道端の見附け次第の草をとつて其草の名を教はり押花にする。農業学校を興立つたばかりの三上先生、馬糞牛糞を手で掴ませて其傍に馬鈴薯を切つて切跡に焼灰をつけて植えさせる木曾先生が木工を教へて下さつて相当のものが出来る様になりました。桐田先生は絵で紫がお好みなのか、キミそんな色に見えるかねと手を入れて下さる色が紫でした。

夏には休暇がなく心頭を滅却すれば火も亦涼しで丹前を着て凝念法をし、午前は授業午後は作業をしたり皆集つて愛の学校を輪読してイクリーの祖国を想う少年をしのび小さな胸の血を沸かしたものでした。豪徳寺で坐禪を組み哲学堂で肝を冷し夜は胆試しで雑司ヶ谷の墓地を通つて鬼子母神に行つて帰つて来る。始め一町位の間隔で出掛けた処済んでからの報告に亀井君が前の人との距離を問はれて二寸と答へて大笑い、亀井君は其時分から剽軽な少年でした。同君が大きな目

あの頃のこと

大類 袈沙吉

にゴミが這入りどうしてもとれず、中村先生の奥様の御乳を入れていたゞいて漸くゴミが出て大喜びした事が今でもなつかしく憶出されます。私は当時向島に居たので朝五時に家を出て通学しました。此方面からは今は故人の山田吉郎君と大類君とで往復とも一緒に乗り大塚仲町から巣鴨監獄の傍を麦畑を通つて通学しました。が今こそ僕より小さいかも知れないが当時は見上げる様な大少年でませていて力もあり行帰りに山田や僕等随分おめられたものです。

寄宿舎に入つてから一緒に風呂に這入つた処背中を流せと大類君にいはれ、やらないといぢめられるし業腹でもあるしデッキブラシで流してやつた処怒られて縮み上りました。品川の岩崎邸へ草取りや羊の飼糧作りの手伝い行き、御菓子や牛乳を御馳走になつた事も嬉しい想出です。

此様な寺小屋式の実務学校から中学校小学校実業専門学校女学校と次々に出来、吉祥寺に移り今は大学に迄発展した四十年を顧みて今昔の感に堪えません。日本教育と共に益々の発展を祈つて止みません。

(実務一回卒・専門別科一回卒)

病中吟

須知白塔

一 句集 "女の世紀" 以後

東宝診療所

寄り添ひて秋の踊り子透視待つ

友の肺凝視めて秋の踊り子達

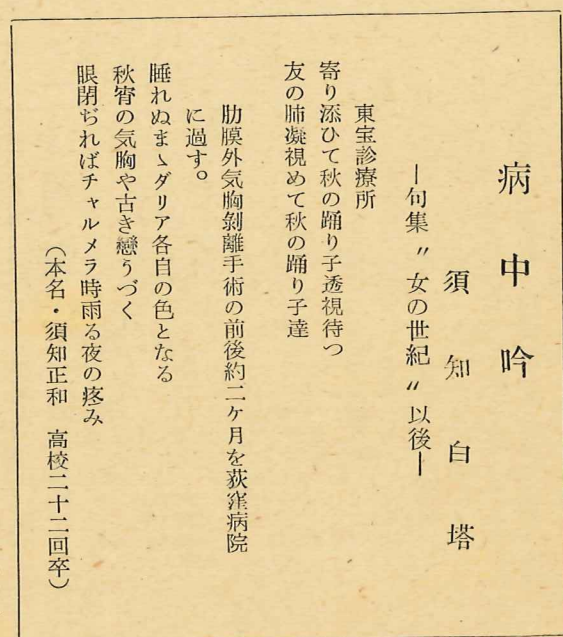
肋膜外気胸剝離手術の前後約二ヶ月を荻窪病院に過す。

睡れぬまゝダリア各自の色となる

秋宵の気胸や古き戀うづく

眼閉ぢればチャルメラ時雨の夜の疼み

(本名・須知正和 高校二十二回卒)



一、私は明治四十五年から大正五年迄池袋の校舎で暮したが私の時代には夏休みが無く一般の学校の暑中休暇の間は吾が校では、「夏の学校」がはじめられた。其の時は午前中授業をし午後は作業と云つて校庭や岩崎小彌太男爵別邸の草取り土運び又は学校で畑作り等をやリ午後の三時には時々オヤツが出た。時には近郊を徹夜徒歩旅行したり夜の試胆会、校内で徹夜凝念会などをやつた、鶴見の総持寺で全生徒が徹夜参禪したこともあつた。

一月一日には当時大抵の学校では新年式をするのを常例としたが吾が校ではそれは無く寄宿者に居る者は同一日の早曉起床、中村春二先生を先頭にして馳け足で池袋から二重橋前に行き皇居を遙拜して帰つて来て雑煮を祝いのを例としていた。晴々とした気分と雑煮のうまさがい出される。

二、植物の時には受持ちの土井藤平先生が生徒一同を連れて校外の野

原をあるかれ其処に咲く種々の花や草を採りあげては其の名前や何科に属すとか其他種々のことを実物について講義された。私には此の時間を郊外散策位に考えて植物の講義には無関心で先生とは遠くはなれて二、三の不良仲間とノンビリと勝手なことを話しながらあるき植物の時間を散策と心得てエンジョイした。

れた。
飾り気のない親切なそして率直な先生の態度に当時親しみを感じていた。爾来三十四年拜眉の機を得ないが新聞や雑誌で先生のお写真を拜見し懐旧の情に堪えない。
(実務一回卒)

箱根懐旧

澁谷光長

馬杉秀昭

外の先生の講義は授業とは気がつかなくつた。処である。学期末の植物の試験の時には此の野原で先生が実物について講義されたことが試験に出たのだから驚いた。前述の次第で私は先生のお話をロクに聞いていなかったのだから満足な答案が書けよう筈無く惨敗して、なさない思いをしたことを今でも忘れられない。

早川の岸を伝ひて雨にぬれ小学一年が登りゆきける
今村邸立ちいで登る箱根路の木質宮ノ下遠かりにけり
宮城野村出づればやがて奥箱根溪の岩むらごしかりしな
仙郷樓のあるじは今も健かか七十はすでに過ぎてをるべし
我れ先きとはいる湯ぶねの中にしてサルマタのまゝ飛込みし子よ
白カバン水筒肩に勢揃ひ乙女峠にのぼりたりける
台が嶺裾の當野に夕霧のたなびく頃のテント目にあり
一年生旅癡かなしく洩らしたる夜尿ごろもを真夜に洗ひき
或る年のテント泊りの暗き夜に試胆会など山に開きし
老いさりて病みて居れば寝ながらに箱根の昔たどる楽しさ
(元成蹊小学校教諭)住所徳岡市賀島町二三七 鷲田方

学生運動私感

月日の流れというものは有難いもので混沌とした終戦時の不安や恐怖もいつしか忘れ去り、不勉強ながらも一応再建の可能性が見えてきたことは大へん喜ばしい。しかし又一方此の様に世の中が落着いてきたのに引き換えて、所謂民主主義下の新教育を受けて育ち次の世代を背負って立たんとする若人の諸問題が次第に注目を引く様になつてきた。戦後急に活発化した学生運動もその一つである。然るに残念ながら新聞等に見

三、大正のはじめの何年頃であつたか記憶が無いが、元東大総長南原繁先生が大学を出られて間もない頃で内務省のお役人をされて居られた時と思うが、池袋で学校の寄宿舎に居られた。寄宿舎は我々とは別棟だつたが南原さんは其の時内務省に勤務のかたわら宿舎に寝起きして二、三の寄宿生の監督補導をして居られた。そして夏にはよく校庭でサルマタ一つで我々とあまりお上手でもないテニスをさ

る此れらの記事は必ずしも読者に片寄つた印象を与えていないとも限らない。そこで長らく成蹊で御厄介になつてきた一学生の立場から主として教養学部に於ける学生運動の一面について二三感じた事を書いてみようと思う。

学生運動なるものに接して先ず驚かされるのは、非常に重要な問題が、しかも各方面にわたつて大きな影響を与える一つのきまつた型にはめられて、極めて無造作に脇目もふらず、ぐんぐん押し進められてしまふという事である。成程学生運動の陣頭に立つ者の中には相当にその方面の勉強もし、退学も留置場も恐れず全く命を的に活躍する闘士も少くはないが、それらに導かれて其の他大勢が彼等と同じく確固たる信念を持つているとは決して考えられない。一般の学生は純情無垢であり、どんな色にも簡単に染められてしまふ。それに、入試という関門を一つ突破しただけで急に偉くなつた様な気になり「自分等が世の中を指導してやらなければ」と思いつつてくるのだから実に始末が悪い。

最近の例として浅間山演習地化の問題をとり上げてみよう。実は浅間の地震研究所というものは、既にして戦後急激に増加した観光客の為に多分にその機能を失つていたのである。従つて極端に云えば米軍の演習地化計画を知つた大学としては、米国の寛大なる科学尊重精神に願つて、最後の止めを刺されるのを許してもらふ様に交渉したのである。ところが此の様な事情を知つていながら学生間の討論を聞いてみると、そんな事はいゝかげんでお茶を濁し、唯一途に「何とか此れを世論に訴えて、学問の自由を侵す××をやつてくれ」ということになつてくる。学校が困らうが世間一般が迷おうが、そんな事はどうでもよいから何か言掛りさえあれば一旗揚げてやろうという勢なのだ。勿論ストだのデモだのをした結果についても一応の議論は交わされるが、要するにそんな先の事はわからんからとにかくやってみようという具合である。学生の実験演習ではあるまいし、それではまるで原爆の実験を大学のど真中でやつてみる様なものではなからうか。何しろ気

にくわぬ事は、いとも簡単にやれ反動だ、頭が古い、ファシズムだとか片付けてしまふのだからやり切れぬ。大学に入ると色々な言葉の意味がさつぱりわからなくなる。保守・反動・祖国・我々・敵・スト・犬(どうやらお廻りか何かのことらしい)エトセトラ。結局最後は民主主義の原則に従つて我々の態度を決定しようということなるのだが、クラス会の相談ではあるまいし、多数決等で苦心して入つた大学と喧嘩をさせられたりしては堪つたものではない。それでいていざ勇士によるデモ決行という段になると、残留組に対して何とか授業は潰してくれと歎願する。まるで五つか六つの子供の様に意志が弱くて欲が深い。授業の方が大事だと思ふなら、デモの方を止めたらよさそうなものだ。どちらが大事かわからん様な不安な態度で一般社会に働き掛けられては社会の方こそいゝ迷惑である。ついでにちよつと書き足しておくが、教養学部の学生数というものは実に四千数百名に及んでるので、仮にその一割が澁谷あたりで騒ぐとなると、附物のヤジ馬も一緒にして、不勉強な又は目測の利かぬ記者諸君には恰も東大中が騒いでいるかの様に見えるてしまふらしいのも困つたものだ。
だいたい選挙権も有るか無しかの年頃なのに(落第しなければ一般に大学入学は十八である)偉らぶつて世論を我が意のままに引き廻すのが我々の義務だ等と考えるのが僭越だが、その点は多くの秀才諸君に敬意を表して一步譲としても、猶まだ合点が行かぬ。「合法的なデモではニュースバリウが無いから……」等と云いながら、国会だが役所だかの近く迄バスや電車を何台も貸切つて東京見物の田舎者の様に乗りつけるのは一体どうした事だろう。彼等の言に従えば大臣や役人に学生の意気を見せるだけがデモの目的ではないはずだ。一騒ぎして大いに無知な一般民衆を呼び覚ます事も同様に重要な目的のはずである。

授業も何もそつちのけで（天才はそれでもよからうが、しかしそれなら何も大学に入る必要は無からう）一円二円と丹念に小銭の寄附を集めて行きながら特別仕立の電車に乗るといふのも実に辻褄が合わぬ、血税を絞上げては豪遊する役人の悪癖が新鮮なるべき学生に伝染しているのか、或はバスや電車の労組が何かと結んで無料で公の車を勝手に動かしてののかはよく知らないが、とにかく半日やそこら威風堂堂と行進出来ぬのでは極右の連中に腰抜けと嘲笑われても一言もあるまい。

少々専門にわたつて恐れ入るが、物理学を学んで行くと熱力学の第二法則というものの御厄介になる「何か一つの熱源（例えば大地とか大洋等）から熱をとつて、それを全部仕事に変える熱機関を作る事は出来ない」というのがその内容だが、元來物理法則には此の様な何ら理論的根拠の無いしかも自明ならざる法則が多く、中でも此の第二法則は最も大胆なものの一つである。今迄多くの有能な科学者が蘊蓄を傾けて努力したにかゝらず、誰一人としてそんな便利な機械を作り得た人が居ないので、経験上此れを一つの法則と考へ広汎な熱力学的现象を解くのに利用するのである。但し今後何時反例が現われて第二法則なるものが否定されるかはわからない。故に第二法則そのものの真偽を追究する事は科学者にとつて一つの大きな課題ではある。しかし私共学生は先ず第一に此れを正しいものと仮定し、その下に展開する有用な熱力学体系を学ばなければならぬ。たとえニュートンの古典力学の如く新理論の発展によつて將來その運用に制限がつけられようとも現在の相当に進んだ科学界に於て何ら矛盾を生じていない第二法則というものは決して価値を失うものではなく、又方一現在の熱力学が根底から覆えされる時が来るとしても、現在の体系により熱力学的な考

枯林忌に上京して

三 上 和 一

……さて先般は枯林忌にお招きいただきまして誠に有難うございました。お蔭様で久し振りに多くの成蹊出身の方々にお目にかゝる事が出来、とてもなつかしく思いました。又学園を訪れましていろいろ御親切におもてなしいただき、親元へ帰つた様な嬉しさを味わうことが出来ました事を深く感謝いたします。

この度の上京程成蹊関係の方々の御厚遇に感激してことはありませぬ。枯林忌にお招きいただいて、上京すると次々にお宿を恵まれ、御親切にいろいろ御案内いただき何から何まで御厚意を受けて約二週間の長い旅を感謝に明け、感謝に暮れ、いつも幸福にみだされていました。そして今も感激に胸の熱くなるを覚えます。

息子が居ないし、娘の養子もいまだに適当な者なく、人生を非常に淋しく思つていましたが、成蹊に結縁のあつたお蔭で沢山の知己を全国に持つ幸福を思うと、決して孤独ではないと、有難さに感動いたします。

私が二月二十日に東京につき、巢鴨に下車して直ちに中村先生のお墓に参り、年来の念願を果し得て、墓前に深い感慨に耽つてから三月二日夕離京し、大磯や京都の一燈園、神戸の真森君などを訪ねて五日夕帰宅するまでを考えるとまるで夢の様な感じがいたします。

この山村に引き籠つてから十年振りに都会に出て、忙しく馳け廻つた事故すつかり疲れてしまいました。それに風邪で臥つていたのが枯

え方を体得しておくことは極めて有益であらう。

大学というものは一つの第二法則である。だんだん世の中が世智辛くなつてきて就職の為にのみ大学に入る者が多くなつたのは甚だ遺憾であるが、苟しくも恵まれて高等教育を受け、やがては社会の指導的地位に立たんとする者は、大学という第二法則の下に於て自らを思慮分別あるものに鍛え上げなければならぬ。確かに大学に入れる者は、世間一般から見れば優れた頭腦の持主かもしれぬ、だがそれは高等教育を消化し得る能力があるということであつて、大学に入り得た者は直ちに一般社会の指導者であるということにはならない。大学の過程を通し、教授と或は学生間で互に論じ合ひ学び合う間に始めて一人前の高等な人間が完成されていくのである。その修業期間位安心して頼つていけぬ様な大学には始めから入らぬがよい。学校側の見解には耳も傾けず、血気に逸つて思うがまま、感ずるがままを直ちに世の中に付き掛けるが如きは、現在の熱力学体系も理解せぬうちに、しやにむに第二法則によらぬ新体系を作り出さんと挑む無謀な態度ではなからうか。第二法則を否定するには充分な根拠が必要である。唯權威あるもの、伝統あるものが故にの無意味な反抗は、若さの陥り易い誤りだと簡単に見過してよい問題ではない。最近の最も悪い傾向の一つである。

「東大の野球部がもう少し強くなると、学生はずつと落着いてくるだろう」と冗談を云われた教授があるが、正に然りである。青春の過剰エネルギーを華々しく発散させるのは結構だが、それは成るべく有益無害な方面に向け、社会に影響を及ぼす様な重要問題は、じつくり腰を落着け、敬虔な気持で充分勉強する様にしたいものである。

（新高二回卒）

林忌に出席したいと無理を押し出しましたのでよけいに疲労し帰ると寝込んでしまいました。

やつぱり年のせいもありましようが、弱くなつた身体と意気地なくなつた事を自分ながらあわれに感ずる事があります。目を閉ぢれば御地の光景がまざく／＼と眼底に写り夢には幾度も失禮を詫び、もう何べんお手紙かいたかわかりませんが現実には非常に気にかゝりながら今日まで失禮してしまいましたことを誠に申訳なく存じます……。

（元成蹊学園教授）

住所 鳥根県邑智郡高原村小下塾

——成蹊会宛禮状より抜萃——

成蹊会 報 告

二十八年十二月十五日日本会委員会を催し、左の事項を議決した。

一、二十九年新役員並びに本会推薦による成蹊学園評議員及び理事を決定した。（三十二頁参照）
二、本会の功勞者につき顧問を設け本会委員会に随時出席願ひ重要会務の諮問に応じてもらう。顧問は各学校同窓会の推薦によることとした。

三、会則第十六条を「本会の会計年度は毎年一月一日に始まり十二月三十一日に終るものとす」と改正した。

次いで十月十六日成蹊大学同窓会発会式（三十三頁参照）が開催された旨、大学同窓会委員長より経過報告があり全員一致をもつて正式に成蹊会参加を承認した。

二十九年度計画としては、二月二十一日の枯林忌一学園としては都合により一月二十一日開催、恒例により会員より講師を依頼して講演の予定一七月にはビールパーティーを開催し、二十九年年度版会員名簿及び成蹊会誌を二冊発行の予定である。

本会を運営しより充実したものに於ては基金が絶対必要条件であり、二十九年度は一般会費の外に基金設定の爲、会長以下大いに努力を尽すこととなつた。